

建築物や構築物は、その計画から設計、建設、運用、改修、廃棄に至るまで、自然環境や地域の土地柄、風土を常に意識しつつ、地域住民や利用者に対するサービスを担っています。

本シリーズでは、道内の建築物や構築物が環境をどのように意識し、どのような手法でサービスを行い、どのように利用されているかをキーワードに紹介します。

「イサム・ノグチの贈り物」

札幌モエレ沼公園

建築家 川村 純一

今年の7月、札幌モエレ沼公園が完成した。彫刻家イサム・ノグチの最大で最後の作品であり、彼はこの公園を「全体が一つの彫刻」と称した。

標高60.2メートルのモエレ山、99の石段で高さ30メートルのプレイマウンテン、子供が安心して遊べるモエレビーチ、桜の森に点在するカラフルな遊具広場、野球場や陸上競技場、テニスコートも芝生のマウンドに囲まれて配置されている。円形の唐松林の中心には、完成したばかりの海の噴水。これは、水の動きや音を通して地球や宇宙を感じることが出来る。そして高さ30メートルのガラスのピラミッドにはレストランやギャラリーもある。189ヘクタールの公園は、全体が一つのランドスケープである。でもここにはジェットコースターも観覧車もない。ゴミ箱さえ置いてないのである。この自然の中で子供たちは自由に飛び回り、いろいろな遊びを自ら発見しながら、自分の限界にチャレンジをしている。

私はイサム・ノグチを札幌へお連れし、この公園のマスタープラン設計に協力した。しかし彼の突然の死によって、それから約17年間、総括設計者としてこの仕事を引き継がせていただいた。この立場から、彼がこの公園を手がけた経緯と、この公園のもつ意味を持つ改めて考えてみたい。

■ 出会い

私がイサム・ノグチに出会ったのは、丹下健三先生のもとで設計見習いを始めて間もなくの1975年。骨太のがっしりした体格、澄んだ鋭い眼光が



草月会館天国工事（撮影：野口ミチオ）

印象的なその彫刻家は、ニューヨークから来日した。草月会館玄関前に高さ10メートルに及ぶ黒花崗岩の彫刻を提案するためだった。そして彫刻が置かれるロビー空間全体の重要性を主張して、彼はその全てを草月流家元勅使河原蒼風から任されることになった。私は建築を熟知したこの彫刻家による空間や光の扱いに魅了され、ただ夢中になって彼の指示に従うこととなった。石と水によるこの展示空間をかれは「天国」と名付けた。

草月会館完成後の1978年正月、私は妻を連れ初めて香川県牟礼のアトリエにイサム・ノグチを訪ねた。そこで触れることが出来たのは、イサム先生の持っている自然や、人への思いやりであり、深い人間性であり、意外な、しかし私にとって心から納得できる真の芸術家の姿であった。

その後、彼は自らの手でニューヨークに美術館「イサム・ノグチ、ガーデンミュージアム」を作り上げ、続いて日本での石の仕事場としていた四国牟礼にも古い蔵を移築し、屋島や八栗山を借景に取り込んだガーデンミュージアムを整えていた。そして日本にもプレイグラウンドを実現したいと願っていた。

1988年正月、私と妻京子がニューヨークでイサム・ノグチといる事を知って、服部裕之氏が訪ねて来た。彼は札幌のIC関連会社BUGの若い社長であり、我々アーキテクトファイブで札幌テクノパークにその本社社屋を設計中であった。イサム先生は我々のために自ら冬季閉館中の「イサム・ノグチガーデンミュージアム」の鍵を開け、展示されている彫刻やプロジェクトを熱心に説明してくれた。そこには実現しなかった子供プールやプレイマウンテン、リバーサイドパークなど多くの公園計画のブロンズ模型があった。「札幌であればイサム先生の公園ができるんじゃないの」という京子の問いかけに、服部氏は直ぐに札幌に国際電話を掛けた。それが夢が現実となっていきっかけとなったのである。

■モエレ沼訪問

札幌市から東京に送られた航空写真、そこに写し出された雄大なモエレ沼を見たときから、イサム・ノグチは強い興味を持ち、そこに念願の夢が実現することを予感していた。1988年3月30日先生をモエレ沼にお連れした。千歳空港から札幌に



最初にイサム・ノグチに渡された札幌モエレ沼敷地航空写真



モエレ沼敷地で指示するイサム・ノグチ

向かう車窓で目にした風景は、13歳の時、母と別れ日本から単身で渡ったアメリカインディアナの景色によく似ているとつぶやいた。札幌市の中心から北東へ約8km、蛇行した豊平川の一部が三日月湖として残された水面に囲まれた約100haのこの土地は、まだ盛んにトラックが出入りするゴミの埋め立て地で、強風にビニールゴミが舞っていた。イサム先生は、モエレ沼に着くなり「ここには、フォルムが必要です。これは、ほくのやるべき仕事です。」と喜々として残った雪の上を歩きまわった。モエレ沼の上に広がる抜けるような空と敷地を取り囲む水を眺め、彼は壮大な公園の実現を決心した。それは大地そのものを彫刻として地球を彫り込むという閃きと符合してから55年間懐き続けてきた思いであり、子供のためのプレイグラウンドを実現させることであった。「これは、大変ですよ、でっかいですよ、僕一人では出来ませんよ。いいですね。」と札幌市職員と我々に同意と協力を求めた。

■マスタープラン作成

当時モエレ沼は、不燃ゴミや焼却残渣など約270万トンのゴミが埋め立て工事の最中であった。札幌市では、公園計画「環状グリーンベルト構想」の拠点公園としての位置づけから計画が出来上がり、既に埋め立てが済んだ部分から外周道路工事や桜の森の植林が始められていた。敷地が広大なこともあり全体をいくつかのゾーンに分け、それぞれ、運動広場、彫刻広場、芝生広場、多目的広場といった分類に従って配置された計画案が出来

上がっていた。

「せっかく広い大地とそれを取り囲む水辺があるのに、それではこの長が活かされていません。自分が何処にいるのかも分かりにくい。まず全体を把握できるマスタープランを作らないと駄目です。」とイサム・ノグチはこの公園の設計を受ける条件として計画を白紙からやり直すように主張した。

彼は、フロリダのマイアミベイフロントパークの場合でも「芸術は場のオリジナリティーを見つけそれを活かしより大きく強調することで、隠すことなどとんでもない。際立った特徴があって面白いし、やがて公園は私の手を離れて皆のものになる」と主張し、市民から水辺を塞ぐように建っていた図書館を壊させた経緯がある。モエレの場合、既に一部国庫補助事業を含め造成や道路、植栽工事を始めていたこともあり、札幌市の立場としては出来れば変えたくない部分があった。そのことが分ると、イサム・ノグチはそれらの条件



イサムノグチのスケッチ図面



モエレ沼公園模型検討中のイサム・ノグチとアーキテクトファイブ

をまず全て隠さず出すように市の担当者に求めた。

札幌市からの資料と条件をニューヨークに持ち帰り、再びアーキテクトファイブの事務所に現れたイサム・ノグチの手には、新たなモエレ沼公園のスケッチが出来ていた。それをもとに事務所総出で制作した全体模型を見ながらさらに考えを巡らすという作業が重ねられた。まるでイサム先生は空から鳥の目で全体を把握すると同時に、子供になって模型の公園を縦横無尽に駆け回っているようであった。

最初の訪問から2ヶ月後の5月20日、札幌市への第1回のプレゼンテーションが、イサム・ノグチ自らの説明で行われた。公園全体を一つの彫刻として考え、幹となる園路と広場を独特の自然で幾何学的な線によって構成し、水と緑と山と施設などの要素を微妙な相互関係とレベル差をもって配置したプランであった。

6月に行われた3度目の札幌市訪問で、モエレ沼公園設計と大通公園のブラックスライドマントラ制作が正式に依頼され、新聞記者発表が行われた。「この公園に先生の彫刻は、置かれるのですか？」という若い記者からの質問に対し、イサム・ノグチは次のように答えた。「この公園全体がひとつの彫刻です。例えば今あなたが履いているスニーカーから何かを感じることが出来たら、それはあなたにとって彫刻ですよ。」公園全体をひとつの彫刻として考え、幹となる園路と広場を、自然でありながら幾何学的な線によって構成し、いくつかの要素を微妙な相互関係とレベル差をもって配置するなど。次々と変更が重ねられながら、だんだんイサムさんらしい形が出来上がっていった。

■公園実現を引き継ぐ

イサム・ノグチの最後となる札幌訪問は10月の下旬であった。札幌のキタバランドスケープ斉藤浩二氏も打ち合わせに加わり道路、広場、植栽が決められた。唐松の林の中央に噴水、プール、カナル、モニュメント、プレイマウンテンそして、ガラスのピラミッドが配置され、マスタープラン

がひとつの彫刻作品になっていった。その中には、かつて彼が提案した計画、あるいは実現させたものも多くあり、我々にそれぞれ参考にすべき作品を説明してくれた。

桜の森の広場に配置された遊具は、アトランタのハイミュージアムの公園にある。水の流れは、ロサンゼルス郊外のコスタメッサやイスラエルの庭園美術館を参考に。後にテトラマウンドと呼ばれるモニュメントは、デトロイトハートプラザや、クリーブランドあるいは大阪万博の噴水と類似点がある。中央噴水や野外劇場はマイアミベイフロントパーク、芝生でカバーされた駐車場は、ハワイワイキキの庁舎で提案し実現した。といったように既に出来あがっている彼の作品を挙げるとともに、長い間抱き続けていて未だに実現していないプレイマウンテンのようなプロジェクトもあった。

それらの指示は、毎年11月17日に牟礼のアトリエで行われていたイサム先生の誕生日まで続いた。当日、ブラックスライドマントラの石膏模型を修正し、モエレ沼公園マスタープラン模型にもさらに手を加えて完成させると、お祝いに集まった人々に84歳のイサム・ノグチは彼の熱い思いを語った。

それから1ヶ月余りで届いたイサム・ノグチ死去の知らせ。大晦日慌ててニューヨークに発ったが、新年早々予定していた先生とのモエレ沼公園打ち合わせが、そのまま葬式参列に変わってしまった。制作途中の彫刻は凍結され、モエレ沼公園を果たしてどうすべきかが話し合われた。公園全体がひとつの彫刻といえるもので到底続けて行くのは困難と思われたが、イサム先生自身がニューヨーク財団を始め多くの友人に、札幌でのこの大きな公園の夢を熱心に話していた事がわかった。どうにか実現させたいとの思いがそこに集まった人々の中から持ち上がった。当時の桂助役(後に市長)を初め札幌市側の理解と要請もあって、イサム・ノグチ財団からショージ・サダオ氏が監修者として加わりアーキテクトファイブが総括設計を進める体制をとることでこの公園事業の継続が確認された。

しかし残されたのは、2000分の1の平面図と、我々がイサム先生と一緒に作った模型だけ。ともかく、残してくれたヒントをたよりに、NY財団の協力を得て設計が再開された。

財団に残された計画案や実現された公園や遊具の図面や模型、先生が我々に残した言葉。そして札幌市造園課の担当者にも参加してもらいイサム作品を出来るだけ見て回ることにした。例えばイェール大学や、チェイス・マンハッタン銀行のサンクンガーデン、パリ・ユネスコの庭園、デトロイトのハートプラザ、ロスアンゼルス郊外のコスタメッサ庭園、イサムさんの遊具があるアトランタ、さらに工事途中のマイアミ・ペイフロントパークの現場と訪ね歩きまわった。

根源に帰って素直に考え直すこと。彼の親友であったバックミンスター・フラーの思想でもある、無駄をなくしエコロジカルな計画であること。そして常に自然と人との関係、環境を考えることなど。イサム先生だったらどうしただろうと常に意識し続けた17年であった。

■「大地の彫刻」と「あかり」

イサム・ノグチは、大地を彫刻するという閃きから、その生涯を通じて庭園や公園計画を実現させるために多くの建築家との共同製作を続けた。実現しなかったリチャード・ノイトラの依頼によるジョセフ・スタンバーグ氏のプール。エドワード・ダレル・ストーンとセントルイスの公園計画。奨学金を得てヨーロッパ、エジプト、インド等を回り再び1950年日本に到着したイサム・ノグチは、若い芸術家や建築家の歓迎を受け、谷口吉郎の慶応義塾大学の新萬来舎、丹下健三との広島平和公園、アントニン・レーモンドのリダースダイジェスト庭園などを一気に手懸けた。ニューヨークに戻るや否やレバーハウスの庭に着手。SOMのゴードン・バンシャフトとの共同制作で、60年代に入ってイェール大学バイネッケ図書館サンクンガーデン、チェイス・マンハッタン銀行のサンクンガーデン、マリーンミッドランド銀行のレッドキューブ等の作品が次々実現された。1961年から5年間続けられたルイス・カーンとの公園計画は机上で



モエレ沼公園ガラスのピラミッド

終わったが、妥協のない挑戦であった。パリ・ユネスコ庭園の実現、イスラエルのピリー・ローズ彫刻公園、70年大阪万博の噴水、デトロイトのハートプラザ、草月会館の庭「天国」、谷口吉生の土門拳美術館が実現され、マイアミ・ベイフロントパーク、さらに札幌モエレ沼公園へとつながった。

「これは僕のピラミッドです」と、公園の中核施設としてイサムがマスタープランに描き加えたガラスのピラミッドは一昨年完成した。雪に遊ぶ子供達を見守りながら親たちが日だまりで憩える場である。高さ31m、1辺が51mのガラスの非整形なピラミッド部分と変形直方体との組み合わせで構成されている。イサムはこれを「ふたつの合わせ」と表現し、高さ50mのモエレ山、30mのプレイマウンテンとともにこの公園の高さのある重要なエレメントと位置づけた。このガラスの建物は夜となると大きな「あかり」の彫刻となる。

イサム・ノグチは、若いときから様々な素材に興味を持ち、噴水の制作などを通して光を意識した彫刻を残した。マグネサイトを用いて光源を内蔵した“ルナー彫刻”もそのひとつ。1952年から始まる「あかり」は、提灯が本来持っている軽くて簡単にたため持ち運びが自由な機能性をそなえ、イサムにとってまさに実用に役立つ光の彫刻であった。来日するたびに新たな形に取り組み、「あかり」に対する思いは終世変わることなく持続された。

「大地の彫刻」と「あかり」、二つのスケールも内容も対局にあると思われる仕事は、イサム・ノ

グチの生涯において何度も挑戦し続けられた。「大地を彫刻する公園や庭は僕の好きな仕事。金持ちの資産として画商たちが売り買いすることもなく、誰も個人で所有したり移動したりできないから」とイサム・ノグチは語っていた。

反対に誰もが簡単に手に入れることが出来、軽くて持ち運びが自由な「あかり」は、彼の彫刻家としての評価を高めるものではなかったにもかかわらず、「あかり」は僕の一番自慢できる仕事です。」と生前よく話していた。

貧富の隔てなく誰でも触れることが出来、自由に使えて役に立つ。そしてなによりも、人間が自然との関係を感じ生きてゆく喜びを感じることの出来る芸術、時間、空間、そして人間に対する愛がイサム・ノグチ彫刻であるといえる。



ガラスのピラミッドでのコンサート

profile

川村 純一 かわむら じゅんいち

1948年東京に生れる。'74年東京芸術大学大学院建築設計専攻修了後、丹下健三都市建築設計研究所入社、草月会館の設計監理を通してイサム・ノグチと親交を得る。'85年クエートのEAST建築設計事務所勤務の後、エジプト、中近東、インド、東南アジアなど旅行、'86年アーキテクトファイブを設立代表取締役就任、イサム・ノグチ日本財団理事、芸大美術学部「杜の会」常任幹事、北海道大学、東京電気大学で非常勤講師。日本建築家協会、日本建築学会、東京建築士会各会員。主な作品：世田谷ビジネスセンター、ソニー白金台オフィス、鳥取フラワerpark花回廊、札幌モエレ沼公園